7 長理第 90 号
令和 7 年 8 月 1 日

会員各位

(一社) 長野県理学療法士会
会長 林 有理
第 54 回長野県理学療法学会
大会長 鶴飼 正二

第 54 回長野県理学療法学会大会開催報告 および表彰演題の公表について

2025 年 6 月 21 日（土）～22 日（日）の 2 日間、キッセイ文化ホール（長野県松本文化会館）にて、第 54 回長野県理学療法学会大会（ハイブリッド形式）を開催し、盛況のうちに終了いたしました。

現地・オンラインあわせて 1,100 名を超える多くの皆様にご参加いただき、心より御礼申し上げます。ご参加・ご支援・ご協力いただきましたすべての皆様に、深く感謝申し上げます。

次回（第 55 回）は、2026 年 6 月 20 日（土）～21 日（日）の 2 日間、下諏訪総合文化センターを会場に開催予定です。大会テーマは「理学療法再考～振り返りからの発展～」です。多くの会員の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

また、一般社団法人長野県理学療法士会 学会大会表彰規定に基づき、2025 年 6 月 21 日に第 54 回長野県理学療法学会大会の発表演題に対する学術表彰選考会議が開催されました。厳正なる選考の結果、同大会閉会式にて表彰式を執り行いましたので、ここにご報告いたします。

最優秀賞

【演題名】大腿骨近位部骨折保存療法患者の入院後 1 年間の生命予後予測モデルの開発と内的妥当性

【所属】信州大学医学部保健学科理学療法専攻
松本市立病院リハビリテーション科

【氏名】中村 慶佑 先生

【選考理由】

本研究は、大腿骨近位部骨折の保存療法を受ける患者の 1 年後生存を予測する新しいモデルを構築した。統計的に信頼性の高い分析手法が用いられており、受傷時のデータから早期に予後を予測できる点が特に高く評価される。低栄養、高齢、大腿骨頸部の骨折、BMI などが死亡リスクに関連することが示され、これらの知見はリハビリ計画や治療方針の決定に貢献する。本研究は臨床現場や患者家族とも共有できる実用性を有し、今後の研究の発展に繋がるものと期待される。

優秀賞

【演題名】脳卒中患者の転倒自己効力感に関連する身体的・心理的要因の検討

【所属】長野保健医療大学 保健科学部 リハビリテーション学科 理学療法専攻

【氏名】荻原 啓文 先生

【選考理由】

本研究は、自立歩行が可能な脳卒中患者を対象とし、転倒に対する自己効力感とその関連要因を心理面・身体面の両面から分析した点が特に高く評価された。歩行距離や抑うつ状態が転倒自己効力感に影響することを統計的に明らかにし、リハビリテーションにおける心理的支援の重要性を示している。本研究は、身体機能だけでなく心理面への介入の必要性を訴え、臨床実践に新たな視点を提供する有用な成果である。今後は高次脳機能の評価も加え、さらなる応用が期待される。

【演題名】大腿骨近位部骨折患者の退院時歩行能力の予測-統計学的手法と機械学習を組み合わせ-

【所属】岡谷市民病院 リハビリテーション科

【氏名】唐澤 昂大 先生

【選考理由】

本研究は、大腿骨近位部骨折患者の退院時歩行能力の予測において、従来の回帰分析に加え、機械学習の決定木分析を導入し、高精度な予測モデルを構築した。特に、病棟内での歩行開始時期が自立歩行の獲得に強く関連することを明らかにし、早期リハビリテーション開始の重要性を具体的に示した点は特筆される。その視覚的に分かりやすい分析結果は、臨床現場でのリハビリテーション計画立案、多職種連携、家族支援への活用が期待される。実用性と学術的価値の双方から高く評価される研究である。

学術奨励賞

【演題名】急性期混合病棟における病前生活への復帰が困難になる患者の入院予測因子の検討

【所属】相澤病院 救急リハ科

【氏名】綿貫 佑 先生

【選考理由】

本研究は、入院時のBMI、Barthel Index、認知症・精神疾患の既往、排泄方法、せん妄の有無、退院時の栄養状態など、多面的な因子から病前生活への復帰が困難となる要因を明らかにした点で高く評価された。特に、せん妄予防や栄養改善を含む早期介入の重要性が示され、急性期リハビリテーションにおける臨床実践への具体的な指針となる成果である。統計的な信頼性も高く、2024年の診療報酬改定を踏まえたチーム医療の実践にも繋がる意義深い研究であり、今後の発展が期待される。

【演題名】農村部後期高齢者の心理社会的要因と座位中断回数との関連

【所属】信州大学 医学系研究科理学療法学分野

【氏名】白井 秀弥 先生

【選考理由】

本研究は、後期高齢者の日常生活において「座位中断回数」という新たな行動指標に着目し、身体的・心理的要因との関連を分析した点が高く評価された。独居で BMI が低く、転倒歴の少ない人ほど座位中断回数が多い傾向が見られ、身体的背景との関係が明らかになった。また、高ストレス状態の高齢者ほど中断回数が多いという予想外の結果も得られ、今後の検討課題とされた。農村部の高齢者に活動量計を装着して実測データを収集した点も実践的であり、健康寿命の延伸に向けた新たな視点を提示する意義ある研究である。

特別賞

【演題名】心不全の入院要因による退院時身体機能の関係

【所属】信州大学医学部附属病院 リハビリテーション部

【氏名】宮嶋 大貴 先生

【選考理由】

本研究は、心不全の入院要因を「医学的要因」と「患者要因」に分類し、それぞれが退院時の身体機能に与える影響を分析した。特に、患者要因による入院では、退院時の身体機能（SPPB 総得点）が有意に低いことが明らかとなり、リハビリテーションの個別最適化や早期介入の重要性を示した。症例数も多く統計処理が客観的で信頼性が高く、再入院予防や機能維持の視点からも意義ある結果である。今後は、患者の行動要因やアドヒアランスとの関係について、さらなる研究が期待される。

【演題名】栄養状態に基づく運動負荷調整が奏功した小児生体肺移植後の一例

【所属】信州大学医学部附属病院 リハビリテーション部

【氏名】宮下 美奈 先生

【選考理由】

本症例報告は、極めて稀な小児生体肺移植後の患者に対し、栄養状態を丁寧に評価しながら個別に運動負荷を調整し、安全かつ効果的なリハビリテーションを実施した点で高く評価された。早期からの慎重な栄養管理とリハビリテーションの連携により、運動耐容能と身体機能の回復を両立させたことは、希少症例における実践的な指針となる。国内でも報告例が少ない小児重症例において、今後の理学療法や小児リハビリテーションの発展に寄与する貴重な報告として意義深い。

以上